

書評

永井良三 監修 杉山裕章, 今井 靖 著
個人授業 心臓ペースメーカー
適応判断から手術・術後の管理まで

(財)心臓血管研究所常務理事・研究本部長

山下 武志

「心臓ペースメーカー」という言葉はそれ自体が人を遠ざけてしまう傾向があるのではないだろうか？ ペースメーカー適応患者の担当医となった研修医の頃、まったく理解できないことの連続、挙げ句の果て教授回診で頭が真っ白になった記憶が評者には残っている。当時1980年代後半、ペースメーカーのことを勉強するための書物は英語のテキストに限られ、さらにその本を開いたとたんに脳が拒絶してしまう「マニアもの」だった。

20年あまり経ち、ようやくどんな読者でも受け入れてくれるペースメーカーの良書が上梓されたことを大変喜ばしく思う。著者の一人は杉山裕章先生、まだ30歳代前半の新進気鋭の若手である。彼は内科研修後、(財)心臓血管研究所附属病院でレジデントを3年間修める中で、不整脈、心臓電気生理学、不整脈デバイスを自

らの専門に決めたという経緯があり、評者はその著しい成長ぶりを熟知しているつもりである。

本書のすばらしさはその間口の広さにあるようだ。現在、不整脈関連デバイスに関する日本語テキストがいくつか出版されているが、他書より格段に「マニアもの」を脱している。研修医、看護師に限らず、すべて医療関係者に対して、ペースメーカーをより身近なものに感じてもらおうという著者の気概がそうさせているのだろう。テキスト構成としてはほぼ5部構成で、(1)心電図の基本を押さえるためのイントロダクション、(2)ペースメーカー植え込みを要する病態・適応、(3)ペースメーカー手術の実際、(4)ペースメーカーの機能、(5)ペースメーカーの設定となっており、読者のレベルや必要に応じてどこからでも読めるように工夫されている。加えて、ベテラン医師と若手医師

の対話形式で話が進められているため、あっという間に読み終えてしまう(評者の先輩である村川裕二先生によれば、これが良書の基準だそうである)。

若手医師がどうしてこのようなテキストを著すことができたのだろう。実は、杉山先生がレジデント時代に必死になって自分が学んだことをきちんと記録していたノートの存在を評者は知っているので、きっとそれが本書の種になったものと想像している。もちろん、共著者の今井先生、監修の永井先生がそれをより洗練させたであろうことも、いずれにせよ、未曾有の高齢化社会を迎え、ペースメーカー装着患者が増加している現在、ペースメーカーを専門家以外に門戸を開こうとする本書の価値は疑いようもなく、医師に限らない医療関係者すべてに推薦できる良書である。評者は関西人なので、会話が関西弁ならばもっと親しみやすかっただろうにと、あり得ない希望を抱いてしまったことを最後に打ち明けておく。

〔A5 頁264 2010年 定価
3,990円(本体3,800円+税5%)
医学書院刊〕